

津和野と益田で上映会

既に6本の作品がラインアップされ、しかもそれが全部自前! 地域みんなで、大きなスクリーンに見慣れた風景と地域の宝物たちの名演技が映し出され、地元の観客たちも心なしか誇らしげだ。作品1編は今年

の東京ビデオフェスティバルで、ベストテンに選ばれた。おめでとう!

祭りの中で披露された神楽や、7人の児童たちのまっすぐな合唱には涙してしまった。昼休みにはボランティアの皆さんが、うごんやおにぎり、弁当などを振る舞ってくれた。ほとんどが手作りで、心から感動を覚えた。

この祭り、実に応援したくなってしまふ熱い祭りなのだ。地元のコミュニティセンターを中心に、左籾小学校の全児童やPTA、近所の人など、100世帯余りの左籾地区の人たちが総出で、自分たち流に短編映画を制作し、上映会を催すのだからうれしくなる。

感動と熱気に包まれる



しまね映画塾の発表会后、懇親会に集まった塾生や関係者
—益田市有明町、県芸術文化センター・グラントワ

「しまね映画祭」も22年目を迎えた。映画祭から生まれ、愛好者が短編を制作・発表する「しまね映画塾」も11年目。今年は益田での開催だったが、こちらも熱かった! 筋書きのないドラマ満載の映画塾は、初参加の塾生が「こんなに面白かったとは」と思わず呟くほど面白いのだ!

16日にグラントワ大ホールであった発表会は、塾生と益田の皆さんの熱さが化学反応を起こし、例年にも増して熱気に包まれた。実はこの映画塾、当初は映像クリエーターのFROGMANも講師として参加していた。今回、発表会後の打ち上げにサプライズで参加してくれ、塾生みんなを喜ばせた。

欧米の高校では映画作りがカリキュラムに加えられる、もの作りのこだわりやリーダーシップ、臨機応変の応用力を鍛えるという。確かに映画作りはプロアマ問わず常に困難の連続だ。多くの人と時間を共有しながら思いを伝えて、形にしていけることは容易ではない。どんなに良いアイデアがあったり、能力がたけていても実行力がなければ0点だ。

今年80歳から9歳までの幅広い年齢層の塾生が、初めて会ったメンバーや地元の皆さまと一緒に作品を作り上げた。昨日まで知らなかった者同士が、打ち上げ終了後も名残惜しそうに帰ろうとしない。大人になって、こんなにドキドキワクワクすることはそう多くはないだろう。

左籾と益田で大画面に映し出された珠玉の作品は、どれもこれも格別であった。

(錦織長成・映画監督)

第4金曜掲載

錦織監督
映画の現場から

●●55